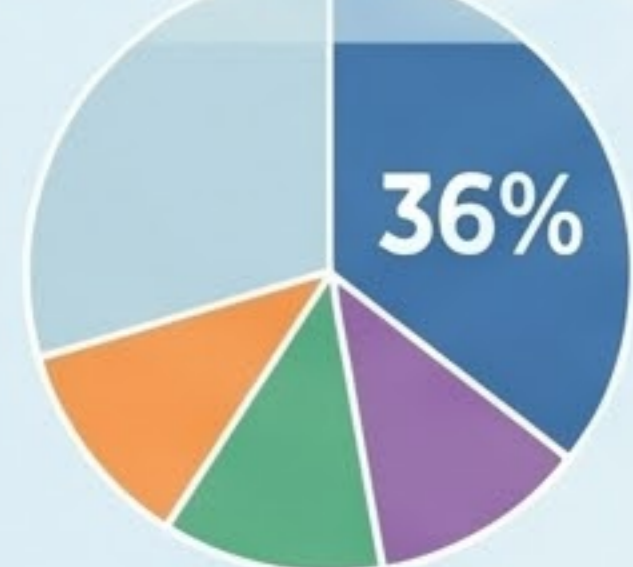


浜松ホトニクス：知財×AI活用の現状と「攻めの知財戦略」への転換

知財の現状：数字で見る圧倒的な基盤

海外売上比率75%超に呼応する知財網： 売上高R&D比率は約10%を維持
北米・欧州・アジアの各市場で20%超の保有率を維持



- 光半導体事業
- 日本
- 米国
- ヨーロッパ
- アジア



FY2025研究開発費184億円（前期比36.1%増）、基礎研究に継続投入

2025年10月時点。グローバルなポートフォリオを構築

組織変革：「攻めの知財戦略」の実装



「知的財産本部」の新設（2023年10月）



ハイブリッド編成による「現場常駐型」モデル

発明の発掘 → 権利化

→ 他社特許対応まで迅速化



企画管理部と戦略部の2部体制。現場量視のモデルを採用



発明提案数が28%増加

2023年の組織効果と職務発明検償金引き上げで意欲向上。日本出願も19%増



IPランドスケープ (IPL) のAI高度化

事業部横断IPL強化。AIによる大量特許の検索・要約処理導入へ



地理統合方法

検明による構計俵書文字、検索を計処理導入へ



物理・光学専門コーパスの社内構築

汎用LLMが苦手な独自語彙辞書やベクトルDBを整備。光学・物理構造の理解へ



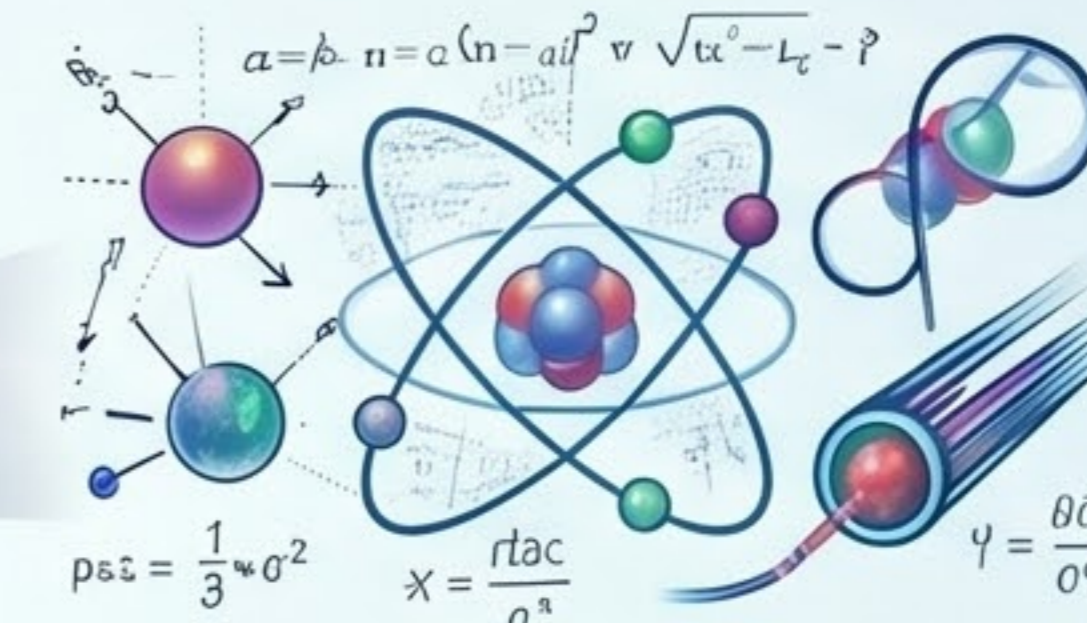
論文×特許の自動統合管理

学術界と連携。論文ドラフトから特許化可能な要素をAIが自動抽出する仕組み構築

AI活用の課題：構造的な壁と戦略的沈黙



AIツールの具体的な導入事例は「非開示」
統合報告書や公式サイトでも言及なし。
「土台作り」に重点



超ニッチ・物理複合領域ゆえの難易度

量子光学や化合物半導体などの高度専門知識。汎用AIでは分析困難



15%の実施料率を勝ち取った成功体験

ステルスダイニング訴訟で高額課容。AIに頼らない高度専門性を発揮とする「攻めの知財」モデル

今後の展望：AI実装の3つのロードマップ